

第2回美術ワーキンググループにおける委員からのご意見

1. 博物館の管理運営方策の充実について

- 美術館は美術作品があつてこそその美術館である。日本はすでに箱（美術館）は十分にある。あとは中身（美術作品）を如何に充実していくかが課題。
- 別府のアートフェスティバルのような役割を今の美術館は果たすことができず、機能不全となっている。
- 公的機関は一度購入した作品を売ることはしない。時勢に応じた運用を行い、作品充実を図っていくことも必要ではないか。
- 美術館の展示設営やカタログの請負業者を入札で決めるようになってきているが、そのことで失うエネルギーや経済効果が大きいという考え方もある。
- 博物館だけでなく、そのまち全体の有様を考えていくことも重要。
- 学芸員が論文だけ書く単なる研究者となっており、マネジメントや資金収集力など不足している能力も多い。
- 博物館に行けばそのまちの情報がすべて入っている、というのが理想。
- 必ずしも1つの館で何でも揃える必要はなく、近隣の博物館とネットワークを形成し、人材・資料などをシェアしていけばよい。
- 資格が増えている現状において、学芸員と他の資格をゆるやかに結ぶ共通の科目を考えていくことも重要ではないか。
- いわゆるスーパーインテント（複数館の統括責任者）が日本にも必要。
- 学芸員資格を取っても就職できる状況にないことが問題。
- 総じて美術館の作品購入が停滞していることは、問題として大きい。
- コレクションの情報開示を積極的に進めていって欲しい。

2. 美術品の鑑賞機会の充実及び美術作品制作への支援の在り方について

- 絵を売って生活ができる国にしたい。アートマーケットのような特別なときだけでなく、日常的に売れることが望ましい。
- 日本人は世界一美術館に足を運ぶ民族だが、同時に美術作品を買わない民族でもある。
- 美術作品を購入して楽しむことに関する消費者教育が必要ではないか。
- ここ20年、ファインアートの市場が世界的に拡大していたにもかかわらず、日本ではうまく機能していなかった。
- 官が保護する分野に元気がなくても、日本のファインアートは健在で、サブカルチャーにも力がある。
- 絵を売る場合、最初は価格を下げるにより、買い手の購入意欲を上げることが必要。

- 日本で建築とファッションが自立できたのは新規需要があり、産業として成立する環境が整っていたという面がある。
- 上野の文化会館で年末深夜にベートーベンの第9交響曲を演奏していたが、夜でもあまり治安を気にしないでいられるのは日本だけではないか。
- 日本人は美術館に行くことが好きというよりも、人の多く入っている展覧会に行くことが好きという面がある。

3. アートマネジメント人材の育成について

- 過日、六本木で開催されたアートフェスティバルには、若い人が大勢やって来て70万人の来場があった。日本でも、アートがビジネスになる可能性を感じた。
- アーティストは補助金依存から脱し、自立することが必要。
- 官による支援は不可欠であるが、多くても良くない。
- 日本の現代美術の国際化は、既に時期を逸している。
- アートに対するマネジメントに加え、アーティストへのマネジメントも必要。
- 京都造形芸術大学の「ウルトラファクトリー」のように、学科を超えた工房として他の学科の学生もオープンに受け入れ、全員が当事者となり得るような仕組みを設けることができれば人材は育つ。
- 絵の買い方をわからない人が多く、そのためのマネジメントが必要。
- 作家とコレクターを結ぶ役割である評論家には、作家を育てようとする姿勢が足りない。
- 学芸員の養成科目の一つに、アート・ディーリングを取り入れたらどうか。昨今の学芸員はコレクションを作ることもできず、展示や運営をわからない人が多い。
- 別府のアートフェスティバルでは、まちなか散策ができるように施設が多面的に広がっており、結果としてまちの魅力の新たな発見につながっている。
- 別府では金券も使用していたが、今後はカード化や長期間使えるようにしていくことが課題。
- 地域の人に当事者意識を持ってもらうということは、利害関係が生ずることを意味する。
- 別府では、アートフェスティバルにより雇用が生まれ、産業振興や高齢者の生き甲斐につながっている。
- 別府は女性誌でも紹介されるようになり、別府そのものを目的に訪れる若い人が増えた。
- 既存の文化施設を活性化させるだけでなく、新たな拠点を形成する施策も必要。
- 作品の質を落とさないことが重要。
- 常に滞在している訳ではないので、一人の秀でたディレクターだけいても限界がある。
- 別府の場合、土地と建物を切り離して事業展開できたことが素晴らしい。
- 日本でも、かつて実業家と作家がうまく組んでいた時期があったが、経済が悪化してそういう時代ではなくなっている。
- 美術に関する既存団体の取組みや仕組みも悪くはないが、国際的な評価となっ

いない。

- アーティスト・イン・レジデンスの仕組みをうまく作らないと、各地を渡り歩くいわゆるレジデンスごろが出てくる。
- 詩人のためのレジデンスを作ったのに、詩人は増えたが詩は減ったということにもなりかねない。
- MIT のアーティスト・イン・レジデンスはスケジュール管理が非常に厳しい。日本の学生を相手に同様の厳しさで望んだところ、結構成果を得られた。
- 東京は大きすぎるので日本の他地域のモデルになりにくい。
- 昨今の国際的ビエンナーレやトリエンナーレは、あまりにも多様化しすぎており、全体を把握することが困難になっている。
- 国際展を行うにしても、海外からの出品に頼らず日本やアジアからの情報発信ということを考えていくべき。
- もう少しマネジメントの範囲を限定した方が質を保つことができ、人材も育つ。

4. アーカイブについて

- アートフェスティバルの取り組みも、ノウハウ普及のためアーカイビングして欲しい。
- チラシなどエフイーメラ（蜻蛉）のようなものも保存の対象として捉えるべき。

5. その他

- 文化について国がどこまで関与すべきどうかは難しい。例えば、文化財の場合は十分な関与を必要としている。